

元愛知縣聾学校教師(現:名古屋聾学校) 土井久吉の生涯

愛知県一宮市: 桜井 強 deaf@naa.att.ne.jp
愛知県岡崎市: 岩月由典
愛知県日進市: 佐藤孝祐



土井久吉氏について

戦後の日本聾史を回顧するときには、藤本敏文氏(1893-1976)、三浦浩氏(1886-1962)横尾義智氏(1893-1963)などをはじめとする戦後の聾啞運動家を外すことはできない。しかし、忘れてはならない人物がいる。東海地方にいる一人ひとりの聾啞者の生活保障と差別をなくすために身を粉にした人がある。その人は土井久吉氏(1902-1965)である。

時は明治後期。当時の日本は富国強兵策の成果が実り、対外戦争で連戦連勝という成功を収め、日本国民は戦勝ムードに浸っていた時期でもあった。そのような時期に土井少年は、名古屋で生を受け、生まれ育った。生来、彼は聴者であったが、小学3年生の時に突然の悲劇が訪れてしまい、高熱のため両耳が聞こえなくなってしまった。音を失っても、あたかも太陽に挑むように前向きに生きた土井少年であった。聴者の中で音のない世界を過ごすことはどんなに困難かということに染みて、彼は私立名古屋盲聾学校(明治34年私立名古屋盲聾学校創立、大正元年に名古屋市立盲聾学校へ校名変更。昭和7年は県に移管)へ転学した。そこで初めて「手真似」という手話に触れて生きる希望を取り戻した少年は、やがてもう1つの真実を知ることになる。それは世の中にある本当の音を聞いたことがない生徒たちがたくさんいたことである。彼は世の中で未知の世界を前にして何を思ったことであろう。

やがて大正6年(1917)名古屋市立盲聾学校を卒業後、さらに技術向上のために名古屋市立工芸学校の図案科を経て、母校の橋村校長の強い勧めによって盲聾学校の助手となったと同時に日本聾啞協会(大正14年に社団法人日本聾啞協会として認可)に入会した。そして大正時代という日本のおかれた立場を悟り、聾啞運動の重要性を説いた。めきめきと頭角を表わし、弱冠24歳で名古屋部会幹事長に命ぜられた。26歳に聴者と結婚。公私共に多忙な日々を過ごしながら、30歳に日本聾啞協会

の理事に選ばれた。愛知県内の聾啞社会における人望は絶大で、多大な期待をされていた。なぜなら戦前は大阪の藤本氏、東京の三浦氏、名古屋の土井氏と日本のろう界を三分する実力者でもあったからだ。こうして土井たちは全国の聾啞組織に力を入れていくのである。だが、土井は33歳の時に突然愛知縣聾学校を追放させられてしまった。追放の原因は聾啞者にとって悲惨な歴史であるミラノで開催された第二回ろう教育国際会議(1880)であり、純粹口話法がろう教育に採用されたことだった。純粹口話法は次第に欧州と米国そして日本へと伝播してきた。本格的な口話法は西川吉之助氏(1874-1940)、川本宇之介氏(1888-1960)、橋村徳一氏(1879-1968)の影響力で全国に口話法が広まった。さらに昭和8年(1933)全国盲聾学校会議で「聾児の口話教育に奮励努力し、……」と文部省の鳩山大臣が訓示したことで、以後手話を排除し、全国各地にある聾学校は先生から聾児の二本の腕を叩かれる風景があちこちで見られた。当然ながら、全国各地にある聾学校の聾啞教員はページ攻撃(手話主義者を一掃する)に遭ってしまい、尾を引くように教育界から消えていった。土井は教師という聖職に対して誠実であり、追放させられたことで同じ障害を持つ児童たちとの世界から離れ、不条理な行為で反論したい思いもあったのだろう。聾啞者の言語である手話をも奪い、今後の聾啞社会に対して少なからず危惧していた。旧態依然とした誤った聾啞者観の前にしてなす術がなかった。

一刻も早く家族を養うために、学生時代から趣味であった陶磁器関連の岐阜県陶磁器試験場に就職した。岐阜県多治見は古来より焼物の地として栄えてきた。平安時代より灰釉設釉陶器等を焼き続けてきたという長い歴史を刻んできた。そのような歴史豊かな地で、芸術家として進むことが天職だと信じた土井は飽くなき美への挑戦に挑む傍ら、著名な美術家との親交を深め、ますます腕に磨きがかかった。全国で初めて民間による総合美術団体

政をもってろうあ者の皆さんの幸せに結びつけるよう早急に推進されることを願いつつはじめのことばとして付記させて頂きたい。

【小学3年で“全ろう”になる】

明治35年12月14日名古屋市中区東田町の紙問屋土井惣兵衛へ三男として生まれた。生まれつき身体は健康で病気が多い病気は一度もしたことはなく育ち、尋常小学校二年生まで学校も1日も休まず生来の負けん気の性質から少々の風邪ぐらいでは無理にでも通学し、従がい通信簿は全部甲であったときいていた。小学校3年のある日、朝から熱があり両親が学校を休むよう勧めたが、持前の頑固と向学心から親の勧告を振り切って学校へ走って行った。3時間目の授業中に態度が変であるので、先生が熱を計ったところ42度と体温計の一番上まで上っており、急遽帰宅を命ぜられた。家に帰り早速医者を呼んで診察してもらったところ、急性脳膜炎と判明し以後3日間というもの42度の高熱は続いた。当時の医学は今のよう抗生物質など即効性のある注射や薬がなく従っておのずから氷まくらで冷やすことに重点がおかれていた。医師はいう、万一助かったとしても馬鹿か或いは歩行困難(今でいう肢体不自由児)になって絶対にもとの健康体には回復は出来ないと宣告した。いまは神に願う如し状況下であった。高熱が引いたあと医師の宣告とも居えるか或いは逆にある意味では神の助けというか極めて軽い(考えようでは)後遺症として両耳が全く聞こえない即ち「ろう」となった。以来父の苦難な人生との闘いが始まるわけである。今まで一緒に通学していた友達からは相手にされなくなるし、毎日の自分の動作が一変して不自由になり少年ながら途方にくれていた。愛知県立名古屋ろうあ学校へ入ったのはそれから間もなくと聞いている。ろうあ学校では自分よりも強度な生徒、生まれつき世の中の音を聞いたことのない生徒達がいる、自分はまだ幸せの方であると自問自答しながら手話を中心に勉学に励んだ。卒業を控え自分の今迄の生き方を考えているとき、ろうあ学校の校長である橋村校長が「土井君は絵も上手だし口もある程度話せるので是非この学校に残って先生となって後輩の面倒を見てほしい」と強く勧められ同校の教師として社会の一員となった。以来昭和9年まで後輩である同胞の指導育成に努めたが当時かの有名であるヘレンケラー女史との出会いもあったと聞くが父の教え子は百人を越えるといっていた。

【絵画と父】

ろうあ学校入学後、人生のさびしさを絵筆に託し黙々と絵の勉強に傾注した。詳しくは知らないが日展を始め多岐に亘る展覧会に出品しこれが参観者に認められ悠々絵画に対する自信と意欲を高揚させられたと思う。ここに父の新聞スクラップの一片を紹介するならば、朝日新聞にはこのように報道している。

×××味気なき唾の寂しさを絵筆にゆだねて×××“東海美術展の「早春斉日」と作者土井久吉さんの生涯”……目下開会中の東海美術展洋画部の会場に入ると最初の壁の裏側にあたる場所に「早春斉日」という風景画が目につく。淡暗い感じのする空の下に赤茶けた塀が続いている。陰気な絵である。小さいものではあるが何となく人にせまるものがある。この作者は土井久吉君(23才)という唾の青年である……後略

さて、このように父は絵とは切っても切れないものがあって、画きたいと思えば東京、大阪等何処でも一人で写生に出掛けたものである。ろうあ学校教師退任後昭和9年多治見市にある岐阜県陶磁器試験場の上絵主任として名古屋の家から通勤した。昭和10年通勤の不便さを解消する為現在私が住んでいる多治見市に住居を移し陶磁器デザインの研究に精励した。そのころデザインの資料としてマッチのレットルや絵はがき等の収集を積極的に行なっていた。当時試験場にはかの有名な加藤土師萌先生もおられ先生とはかなり懇意にして頂いていたようである。昭和20年終戦後試験場をやめて名古屋の鳴海にある八光会に入りこでも絵の仕事とろうあ者の指導をしていたと思うが八光会には現在日本信販(株)社長である山田光成氏が会長であったと記憶しているがその頃、ヘレンケラー女史との再度の出会いに感激したという。その後昭和24年多治見へ帰り陶磁器上絵付工場へ就職し晩年まで絵筆一筋に貫らぬいたが、父の作品は伊勢湾台風で殆んど滅したが本当に残念であった。

【多彩な趣味と中日ファン】

父は絵は別として色々な趣味があった、野球観戦、水泳、将棋、麻雀などが主なものであり、野球については若い頃鳴海球場に出掛けたり多治見スタジアムへは日曜日は殆んど観戦に行き夜はテレビのプロ野球を熱心に見る、大の中日ドラゴンズファンであった。野球のない時は私や弟と将棋を楽しみ、私の棋力が上廻っているためにどうしても勝てない、しかし持ち前の頑固から勝つまで何回でも向ってこられるので最後は私が負けると本当に嬉しそうに喜び就寝する。又麻雀については私と兄と弟や、私の義兄

等を混じえて正月、お祭り等に楽しんだが八光会にいる時木片で麻雀を型どりこれに父が絵を
書き結構立派なパイがあつて私は小学生であつたがこのパイで父から教わつた。今麻雀といえ
ば“カケ”が通例であるが父はタバコ1つでもカケることは絶対にせず専ら勝負毎は嫌つて
いた。水泳については若い頃知多の大野海岸から新舞子まで遠泳をしたそうであり父は耳を除
いて丈夫な人であつた。さて父がろうあ関係団体において名古屋ろうあ学校より没するまで先生、
先生と慕われたが最後のつとめとして昭和39年夏の東海4県ろうあ者の野球大会当時が思い
出されます。その夏軽い脳卒中で倒れ半月ほど自宅で静養していたがこの野球大会を控えてそ
の運営等に私も父の補助役としてこの大会を無事終了したが杖をついて開会式表彰式に臨む父
の姿が今も浮かびます。昭和40年2月勤務帰りに倒れ薬効空しく4月永眠されたが告別式に
おける県知事、多治見市長、その他多数各位の弔辞、参列を賜わり父は本当に幸せな人であつ
たと共にろうあ者の福祉のために微力ながら一生を捧げた人であつた。



ろうあ文化 昭和34年6月15日発行
【役員横顔】東海ろうあ文化連盟
副委員長 土井久吉

名古屋市中区東田町の紙商の三男として生まれ、東田小学校三年のとき脳膜炎が原因で両耳を失
聴し名古屋ろうあ学校に転学して普通科を終え、名古屋市立工芸学校図案科(現工芸高校)を卒
業と同時に、母校のろうあ学校の先生となり十三年図画科の教官となる。昭和10年岐阜陶磁
器試験場(多治見市)に転勤約9年大東亜戦が始まると共に名古屋市北区の佐治タイル会社に入
社し、八光道場の指導員として兵器増産に従事する。終戦後八光会鳴海授産所(ろうあ者)
の主事をなし昭和24年から多治見授産所に勤務し今日に至る。氏は五十六才で温厚誠実な肌
ざわりの柔かい人である。現在の名ろう校出身者には氏の教え子が多く、ために先生といはれ
尊敬をうけている。又戦前は大阪の藤本氏東京の三浦氏、名古屋の土井氏というように日本ろ
う界を三分する実力者でもあつた。昭和24年当連盟が結成されるや副委員長として敏腕をふる
い、次期委員長を約されていたが間なく多治見市転居と共に辞任し五カ年空白があつたが、
再び副委員長に帰り咲いた。氏は二十六才で結婚し三男四女の子福者であるが、今は他家に嫁し次男、三男と四人暮らしで
ある。洋画の油絵には特技があつて各展覧には度々入選している。日展審査員鬼頭鍋三郎氏や

陶芸家の加藤土師萌氏などと交友がある。現在は岐阜県身体障害者福祉審議委員、県ろうあ福
祉連合会長、多治見身障福祉会理事、ろうあ生活研究会相談役など沢山の役員を兼務している。



日本聴力障害新聞 昭和40年6月1日発行
【土井久吉氏急逝す】藤本敏文記

五月の大会で東京へ出ていた時、全日ろう連の理事土井久吉氏の急死を大家連盟長から聞かされ
て驚いた、氏はまだ六十二才の若い人で、全日ろう連の理事に返り咲いてまだ一兩年の、こ
れからの活躍を期待していた人で、脳溢血の急死とは信じられない位である。氏はあまり酒も
煙草もたしまない、謹直家だから一層の驚きである。氏は生粋の名古屋っ子。紙問屋の次男に
生まれ、七、八才頃、失官。名古屋市立盲啞学校を出た。橋村校長に可愛がられ、若干もなく
当校の先生として同校教師となり、また卒業生の中心としてこの方の指導にも当って余聞があ
つた。性温順、如才のない人柄で、人望が厚かつた。全日ろうの前身日ろう協の理事に推され
た時は、第一の若手として将来を囑目されていた。それから橋村校長と進退を共にして八光会
に入ったことが、その進路の一つのさてつを投じたが、間もなく岐阜県多治見市の故郷に返り
咲いて、以後は家事に専心してろうあ社会から離れていた。これがこの人を幸運に導いたこと
が確かだ。しかし土井さんは郷愁があつた。それはろうあ社会への復帰であつた。子供の頃か
らのグループは生涯忘れ難いもので、この人の善良さが、これをもってうかがえるような気が
する。



【聾啞界73号81~84頁】
昭和10年12月24日発行
名古屋部会 昭和10年7月15日

長らく本会の為め■■し今日の隆盛に導いた土井久吉氏には聾教育生活を引退せられたにつき
午後一時より愛知縣聾学校講堂で同君慰勞金贈呈式を行ひ、三浦本部理事が東京から遙々参列
せられて此催の為め一段の異彩を放つた。来賓としては橋村校長、吉川氏等であつた。先づ小
松原君の開会の辞に次ぎて発起人総代及當部会総代牛山弘氏の謝辞に続き同窓会代表水谷直次
氏の謝恩の辞で手演があり、次に発起人を杉江兵一氏、同窓会を杉山徹氏それぞれ代表して慰
勞金(目録)の贈呈をなし之に封して土井氏より丁寧なる謝辞を述べられ、来賓の三浦理事登壇
同君の社会事業の功績を讃嘆し今後我協會を援護することを切望する旨述べられ、橋村校

長、吉川氏瀧氏らの祝辞があつて之にて式を閉ぢ記念写真の撮影後別室に移り、茶菓を饗しつゝ大いに同君の前途を祝福し、散会時に午後五時因に午後六時より改良亭で開催の慰労宴会に出席し盛会裡に十時閉会した。

＜土井君慰労発起人の謝辞＞

謝辞

■に本日を以て私共の日頃敬慕せる土井久吉君の爲め慰労金贈呈式を興行するに當りまして私は発起人総人として謝恩の辞を申述べる無上の光榮を有する次第であります。私は元來文章が拙劣で十分謝恩の意を表する事が出来ませんことは何分御諒恕を願ひます。さて君は今般教育界を御去りになつて岐阜縣立陶磁器工業試験場図案課に勤務せられまする趣私等一同としては實に遺憾とする次第でありまして、君の心中を思つて淋しく感ずる所であります。回顧しますれば大正十一年春愛知縣聾哑学校の前身名古屋市立盲哑学校に就職せられ、元來十三年有餘になりましたが、其間孜々として斯の教育に捧げられ、他面卒業生の職業又結婚の斡旋法律の通訳等あらゆる方面に亘り慈父にも及ばぬ御骨折を致され、誰しも日々君の御高德を拜し御厚意を忝うした私共の感謝は永久に忘れる事が出来ません。加之名古屋部会幹事長或は副会長として終始一貫事業の拡張に力を傾倒せられ啓蒙善導に蓋瘁せられました其の忠實熱誠の功塞しからず、加ふるに御高潔なる人格と深い学問とに依り當時上下の畏敬と信望とを■はれ、昭和七年春日本聾哑協会理事に當選せられましたことは名古屋部会の上に一段の光を輝かしめましたことと信じます。今名古屋部会に在る至寶として重んぜられ、人望を一身に集めていられました。突然教職を絶たれたることは實に意外の感に打たれ、且つ私等の悲痛のみに止まらず、我聾哑教育界にとり痛惜に堪へぬ處であります。茲に君の永年の功勞を謝し、併せて前途益々御多望の御身の上を思ひ、君の御清福と御健康とを神かけて祈り上げます。扱御贈呈金は誠に輕少ですが君の漬年御蓋瘁されたる報恩の一端として呈上致す次第でありますからどうか御受納下さいませすれば幸甚に存じます。

昭和十年七月十五日

土井君慰労発起人総代 牛山 弘

謝辞

本日は本会副会長土井久吉君の爲め慰労金贈呈式を挙げるに際しまして私が本会総代として感謝の辞を述べることを得ますのは最も光榮とする處であります。更に同君愛知縣聾哑学校退職の風説を耳にしますや、私共は聾哑教育界の爲め一大損失であると痛嘆惜く能はず、私かに其

が事實にあらざることを祈つて居ました。然る処案外にも事實となりて現はれ隣縣下とは申しながら十里の山川を隔てる多治見に去られて陶磁器試験場図案課に勤務せらるることになりましたのは洵に遺憾に堪へられません。御承知の如く君は同校在職の傍ら大正十一年より本会の庶務にあつて、元來十三年の久しい間孜々として終始一貫刻苦淬動会務を無理せられ部下を監理督■し以て其の礎を固め、面して今回退職に至るまで本会の面目と名譽ある歴史を擁護されて來られたのであります。加之昭和七年春本部署に挙げられて以來専心会務に當り、常に同患者の地位向上の爲に凡ゆる方面ゆる立場から聾哑者の指導者となられ渾身の努力を拂はれたのであります。欺くの如く君の献身的な活動ぶりを見て私共は涙ぐましいばかりに此の純真犠牲の美しさに打たれたものであります。然るに今度口話教育の犠牲となつて突然教職おり引退されたことは本会は捨も羅針盤を失つた船の如く呆然自失、全く爲す術を知らない有様で御座います。併し今更是非もない事と諦める外は御座いません。然し君の容易ならざる努力により今日の盛況を見るに至りましたことは會員一同感銘忘る能はざる處であります。今後君は方面を異にする工業界に従事せらるるのであります。何卒該方面に於て充分の天分を發揮して社会の爲め貢獻せられんれことであります。茲に一同に代りて謹んで微

衷を申し述べて感謝の辞を致します。

昭和十年七月十五日

社団法人日本聾哑協会名古屋部会會員総代
牛山 弘

謝辞

本日茲に私共の尊敬する土井先生の慰勞式に當りまして私は聾哑部同窓会を代表しまして一言御挨拶を申し上げます。土井先生は私共の母校に於て更に十三年の久しきに亘り聾哑教育の爲に熱誠と慈愛とを以て終始一貫蓋瘁せられたるため、今日の吾が同窓会會員の大多数の者は先生の後懇篤なる御教導を受け、母校卒業後社会に立ちても先生の御温顔を忘るることが出来ないであります。先生は穎智人に優れ、手腕常に卓絶し、母校今日の繁榮に資興せられたるは勿論教職の傍日本聾哑協会の發展に蓋され、或意は吾が同窓会會員の指導者を以て任せました。實に先生は私共の恩師であり私共の羅針盤であると同時に先生を吾が會員に有することは私共の大なる誇であり、又至寶であります。此意味に尽きまして先生今回の退職は残念至極であります。教壇を辞された後と雖も相変わらず將

来長く私共を御善導下さる様御願ひ致します此機会に當りまして先生従来の御功績を讃へ、且つ自然の声でありまして、今後其先生の益々御健全ならんことを御祈りする次第であります。一言御挨拶に代へます。

昭和十年七月十五日

聾哑部同窓会総代 水谷 直次

本日は聾哑教育界及聾哑社会事業のために聊か微力を盡した私に封し欺くも盛大なる慰労金贈呈式をお開き下さいましたのみならず、同窓会の皆様始め全国の聾哑諸氏並に一般有志の方より結構なる慰労金を賜りましたことは私一生忘却出来難き有難いことと存じ只管感涙にたへません。星霜は只長いと言ふのみにて其の間皆様よりいろいろ御芳情に預つただけで、私の方より何等力を盡し得ませんでしたことは實に汗顔の至りにたへぬ次第であります、茲に此様の御芳志に封し満腔の感謝の意を表する次第であります。今度突然教育界を退くことになりましたが向後の教育界口話万能時代となり、今後の学校を風靡する時も最早早晚のことと存じます。此際の私の退職は私の為に實に悲しき至りですが、一面には我日本の陶磁器社会への飛躍の第一歩を印したこととなる次第でありまして、只今の私の心境は別に異り御座りません。私はつくづく思ひますに人生の最大幸福、又は皆様聾哑者方々が希望の的となっている所謂「先生」の尊語は何等最上の幸福ではないと思ひます。社会の文明の進歩発達は主として万人の人々の共同労働に依つてこそ進歩発展を期する所以であると存じます。故に皆様も私と同様に社会の職業戦線に活躍されまして晩器大成の賽を挙げて下さるやうに希望致します。私も母校の卒業生の名を汚さぬ様に盡力致し、以て本日の御厚志の幾分にでも御禮致したいと存じます。以上聊かながら謝辞と致します。

橋村会長の祝辞

土井先生がこの度岐阜縣立陶磁器試験所へ御栄転になりましたにつき多年の御高恩に報ゆるためここに慰労金贈呈式を挙げられましたことは誠に感激の外はありません。不肖この栄光ある盛典の末席に列り感概無量なるものがあります。願くは土井先生には益々御健勝を心から御祈りする次第であります。

感謝状

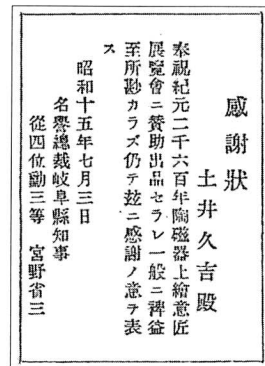
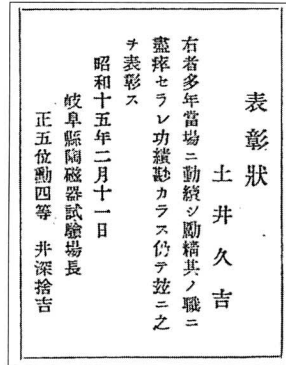
先生多年我が愛知縣聾学校に勤務せられ終始一貫至誠懇切以て生徒の教養に貢献せらる洵に感謝に堪へざるなり仍て置時計表個並金老封を贈呈し謹みて謝意を表す

昭和十年四月十二日

愛知縣聾学校教育会長 加藤音次郎
土井久吉殿

◆◆◆◆◆
【聾哑界 93号 38頁】
昭和15年12月26日発行
名古屋部会 昭和15年7月4日

土井会長左の通り表彰状及感謝状を受けらる。



◆◆◆◆◆
【偉大なる先達を慕いて】 118~119 頁
愛知県立岡崎聾学校創立 100 周年記念誌別冊
平成 15 年 11 月 1 日発行

●ろうあ者教員の追放への批判

昭和8年には、愛知県聾学校の教員の聴覚障害の土井久吉先生も退職(転勤)に追い込まれました。土井久吉氏は名古屋盲聾学校(昭和7年4月、盲聾分離して愛知県聾学校)の教員(専門は美術)で日本聾哑協会名古屋部会の幹事等の役員を歴任されました。土井久吉氏については、「愛知県名古屋聾学校同窓会創立30周年記念誌」(昭和52年刊)の中に、元愛知県立千種聾学校長(元愛知県立名古屋聾学校教頭)の後藤正明氏が次のように書いています。

【同窓会創立30周年に想う】 後藤正明

◎ (手話時代の同窓会)

翌年8年(昭和)新甫町に新築された聾学校では手真似一つも見ない様にと、父兄の念願から、土井先生を岐阜県陶磁器試験所へ栄転させて、それと同時にこの同窓会は解散したのです。口話法隆盛の犠牲となって消えていったのです。聾児が口話を身につけ自ら進んで社会人の仲間入りするためには止むを得ない過程であったと思います。

この文章は大変重要なことを証言しています。昭和7年ごろの聾教育や聾学校の様子手話から口話への転換に伴う聾者、聾教員への処遇、特に聾啞者教員パージの様子が如実に想起され伝えられています。

● 非合法的扱いの手話

特に、「口話教育上大きな障害になっていた手話科生が1全部卒業し、全学年口話教育の徹底を期していた」状況は、手話禁止、ろうあ者否定、ろうあ教員排除という一連の動きでした。この文章にもあるように、手話を中心としたろうあ者の集まりは、聾学校においては非合法的なものであり、地下に潜らざるを得なかったようです。これは名古屋聾学校のできごとでしたが、各地の聾学校(盲啞学校)でも似たり寄ったりの状況があったものと思われます。かくて、土井久吉氏のように、大変素晴らしい先生が次々と犠牲となり、時代の波に飲み込まれて聾教育の世界から締め出されていったのでした。

【参考文献】

土井宏之氏証言

愛知県立名古屋聾学校創立百周年記念誌

第25回東海ろうあ者大会記念誌

岐阜県ろうあ福祉連合会創立20周年記念誌

愛知県聾学校25年史

聾啞界第73号・第93号

愛知県立岡崎聾学校創立100周年記念誌別冊

「藤本敏文」那須英彰・須崎純一著

土井久吉の年譜(1902～1965)

明治 35 年(1902)12 月 14 日	名古屋市中区東田町の紙問屋土井惣兵衛の三男として生まれ
明治 43 年(1910)	東田小学校 3 年 高熱<脳膜炎>による失聴(8 才)
明治 43 年(1910)	私立名古屋盲啞学校転学(8 才)
大正 6 年(1917)3 月 21 日	名古屋市立盲啞学校技図卒業(15 才)
大正?年	名古屋市立工芸学校図案科入学 (現：名古屋市立工芸高校)
大正?年	名古屋市立工芸学校図案科卒業 (現：名古屋市立工芸高校)
大正 11 年(1922)4 月	名古屋市立盲啞学校助手採用(20 才)
大正 13 年(1924)11 月	名古屋市立盲啞学校訓導採用(22 才)
昭和 3 年(1928)	結婚 (26 才)
昭和 4 年(1929)3 月 2 日	名古屋市立盲啞学校第十三回総会功労者表彰式 5 年勤続(27 才)
昭和 8 年(1933) 4 月	愛知縣聾学校嘱託教員採用(31 才)
昭和 10 年(1935)3 月	愛知縣聾学校退職(33 才)
昭和 10 年(1935)4 月	岐阜県陶磁試験場就職(33 才)
昭和 19 年(1944)	佐治八光道場指導員(42 才)
昭和 20 年(1945)	八光会鳴海授産所主事(43 才)
昭和 24 年(1949)	多治見市授産所就職(47 才)
昭和 40 年(1965)2 月 18 日	多治見市授産所退職(63 才)
昭和 40 年(1965)4 月 27 日	脳溢血 (のういっけつ) により永眠(63 才)
昭和 40 年(1965)4 月 29 日	告別式 法名釋久恩居士

ろうあ運動の経歴

大正 11 年(1922) 社団法人日本聾啞協会名古屋部会入会

大正 15 年(1926)～昭和 6 年(1931)社団法人日本聾啞協会名古屋部会幹事長

昭和 7 年(1932)～昭和 12 年(1937)社団法人日本聾啞協会名古屋部会副会長

昭和 13 年(1938)～昭和 19 年?(1944)社団法人日本聾啞協会名古屋部会会長

大正 15 年(1926)～昭和 19 年?(1944)社団法人日本聾啞協会本部評議員

昭和 33 年(1958)～昭和 40 年(1965)岐阜県ろうあ福祉連合会会長

昭和 37 年(1962)～昭和 40 年(1965)東海ろうあ連盟連盟長(4 代目連盟長)

【参考文献】

土井宏之氏証言・愛知県立名古屋聾学校創立百周年記念誌・第 25 回東海ろうあ者大会記念誌

岐阜県ろうあ福祉連合会創立 20 年記念誌・愛知縣聾学校 25 年史・八光会要項・聾啞界

愛知県立岡崎聾学校創立 100 周年記念誌別冊



故土井久吉氏の墓



若き土井久吉氏(26才)



法名釋久恩居士



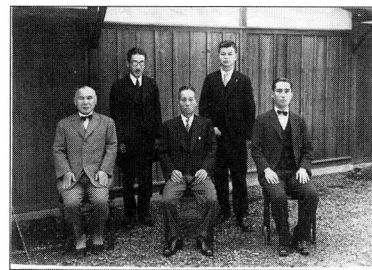
第1回文部省後援名古屋市立盲啞学校主催聾教育口話法講習会記念写真(24才)



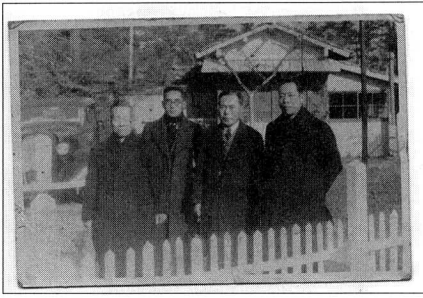
昭和5年の年賀状



名古屋市立盲啞学校職員集合写真(30才)



左後 安藤先生 右後 富板先生
左前 盲先生？ 中央前 橋村先生
右前 土井先生



八光会事務所前

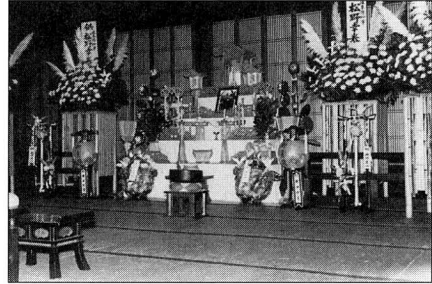
左から 橋村 土井 田村 山田会長



第 14 回東海地区ろうあ者野球大会
岐阜県多治見市営球場
昭和 39 年 8 月 9 日 (62 才)



昭和 23 年 9 月 28 日八光会鳴海授産場
ヘレンケラー女史視察記念
右端 土井久吉氏 手話通訳



告別式の様子
昭和 40 年 4 月 29 日



晩年の土井久吉氏(62 才)



遺影と土井久吉氏の作品



陶磁器作業

【写真資料提供】

土井宏之氏所蔵

愛知県立名古屋聾学校創立百周年記念誌

第 25 回東海ろうあ者大会記念誌

岐阜県ろうあ福祉連合会創立 20 年記念誌